

音楽の散歩道 その10の8

— ベートーヴェンの「第9」200年記念 —

悲しみと苦悩に満ちた真実のショパン、ショパンを見守るサンドとリスト(5)

| 鹿児島市 |

| 東区・荒田支部 |

| 大海クリニック・大海宮崎クリニック |

| 加治木温泉病院 |

栗 博志

栗 隆志

大西 浩之・海江田 寛

夏越 祥次

ショパンを理解するには、ショパンの周囲の音楽家、あるいは初期のロマン派の音楽家達が、幼少期を含む若い時代に、どのように音楽と関わってきたか、あるいは文学を含む芸術、旅行、友人、知人、芸術家達と如何に係わってきたかを、知る必要がある。

ここでは、その代表としてリストとメンデルスゾーンに言及しているが、本稿では、リストの他、シューマンやシューベルトの交響曲に関しても、私のLP、CDを供覧しながら述べたいと思う。

(Part 24) リスト、メンデルスゾーン、そしてショパンの人生

〔2〕 フェリクス・メンデルスゾーン・バルトルディ (1809 - 1847) (つづき)

さて、フェリクスは少年期のピアノの師で、ロンドンで名声を博していたモシュレスを頼り、10回もイギリスを旅行した。

モシュレスは、ベートーヴェンが最も信頼を置いた音楽家であり、ベートーヴェンの最高傑作、「荘厳ミサ曲、ミサ・ソレムニス、1823」のロンドン初演者である事は已に述べた。

1回目のロンドン旅行は、1829年 (20歳)の時、そこで自作の「交響曲第1番、1824」を演奏指揮し、ロンドン・フィルハーモニー協会に献呈し、名誉会員に推挙された。

スコットランド旅行の印象からは、「序曲・フィンガルの洞窟、1830」を書き、プロイセン皇太子に献呈した。

更に「交響曲第3番・スコットランド、1831」を書き、ヴィクトリア女王に献呈。

またイタリア旅行からは、「交響曲第4番・イタリア、1833」をロンドン初演し、ロンドン・フィルハーモニー協会に献呈した。

フェリクスは、旅行の印象を音楽に昇華すると共に、旅行にはスケッチ・ブックを持参し、絵画も多数残した。

好奇心が強く、何にでも興味を持ち、何にでも対応できた。つまり、才能があり、精神的余裕があったのである (図195)。



図195 メンデルスゾーン画「ダラム大聖堂」(Ca.1829)
メンデルスゾーンは旅行により作曲・絵画と多才ぶりを示した

また1530年の「アウグスブルグ信仰告白」から300年に当たる1830年の、「宗教改革300年祭」に演奏する予定で、「交響曲第5番・宗教改革、1830」を作曲した。

この曲の第4楽章には、ルターが1529年に作曲したと言われるコラル、「Ein feste Burg ist unser Gott」が用いられている。

倒置法の強調文で直訳すれば、「私達の神は、堅固な（山）城」となるが、「神はわがやぐら」「み神は城なり」などと様々に訳されているようである。

簡略な訳は覚え易いが、意味は分かりにくくなる欠点がある。一長一短である。

なお、メンデルスゾーン・バルトルディー家が、ルター派プロテスタントである事は、既に述べた。

「交響曲第2番・讃歌、1840」は、グーテンベルグの印刷技術完成400周年記念祝典のために、ライプツィヒ市から依頼されたものである。

独唱、合唱付きで、ベートーヴェンの「第9」を彷彿とさせ、ベートーヴェンの影響を、フェリクスが強く受けて作曲したとも言われる。

この曲をフェリクスは、「讃歌、聖書の言葉による交響カンタータ」と名付けた。

第1部はシンフォニア、第2部はカンタータ楽章となっており、第2部がカンタータ楽章で、神の栄光を讃えている。

1840年にライプツィヒの聖トマス教会で初演され、ザクセン国王に献呈された。

この曲で重要な事は、歌詞がルターの独語訳の聖書だと言う事である。

ルターの「ドイツ語訳の聖書」とグーテンベルグの「活版印刷」が極めて密接な関係にある事は、歴史的に重要である事に、頭の良いフェリクスは気付いていたのである。

ただ現代のこの曲に関する解説では、両者の関連に深く言及するものはない。

歴史を深く考えないから気付かないのであ

ろう（本文に続く、宗教改革を参照の事）。

バッハの時代に於いても、ライプツィヒの聖トマス教会は、ルター派プロテスタントの重要拠点の教会であり、バッハ自身、その精神に則り作曲したと考えても、誤りではないだろう。

フェリクスは、この他にも多数の宗教音楽、詩篇、カンタータ、オラトリオ等を書いたが、オラトリオの傑作、「エリア、1846」は、ジェニー・リンドの声に合わせて作曲された（図196）。

ジェニーは、フェリクスやショパンと親しかった。



図196 ジェニー・リンド（1820-1887）
ジェニーは、19世紀を代表するオペラ歌手で、メンデルスゾーンのオラトリオ「エリア、1846」のハイF#音は、ジェニーの声域を考慮して作曲された

☆ 宗教改革

カトリックの頂点に立つ、ローマ教皇・レオX世による「免罪符」の販売（1515年）に対する、「ローマの牝牛（ローマに乳を搾りとられる）」・ドイツの「福音主義」の大学

教授（神学）のルター、およびスイスのツヴィングリヤ、「予定説」のカルヴィンらによる非難、抗議は、やがてプロテスタント（抗議する人）による宗教改革として、イングランド、スコットランドを含む全ヨーロッパを巻き込んで、カトリックとプロテスタントの果てしない抗争として続く事となる。

特にルターが独語に翻訳した新約聖書は、グーテンベルグの活版印刷の力もあり、大衆の間に急速に流布され、聖書に目覚めた大衆の宗教改革に、拍車がかかった（図 197）。



図197 ルターの独語訳聖書（ラテン語から独語）、1534
グーテンベルグの活版印刷（1440頃）で聖書中心の宗教改革が急速に進行

（注、筆者は、宗教には全くかかわりがありません。単なる歴史好きです。それも一般常識程度で深い知識はありません。音楽に関しても同様です）。

ここドイツでは、この宗教戦争に端を発した「30年戦争、1618 - 48」は、国際戦争に発展し、総死者数は、800万人以上に達したと言われる。

残念な事に、宗教を基盤にした戦争は、現代でも絶える事なく、地球上の各地で続けられている。

なお、カルヴィン派プロテスタントは英国では、「清教徒、ピューリタン」、仏国では「ユグノー教徒」と呼ばれ、オペラでは、ベッリーニの「清教徒、1835」、マイアベー

アの「ユグノー教徒、1836」が知られる。

図は、ベッリーニの「清教徒」でガヴァッツィーニ指揮である。スペインを代表するモンセラット・カバリエ、ピエロ・カプッチェルリらのサイン入りである（図 198）。

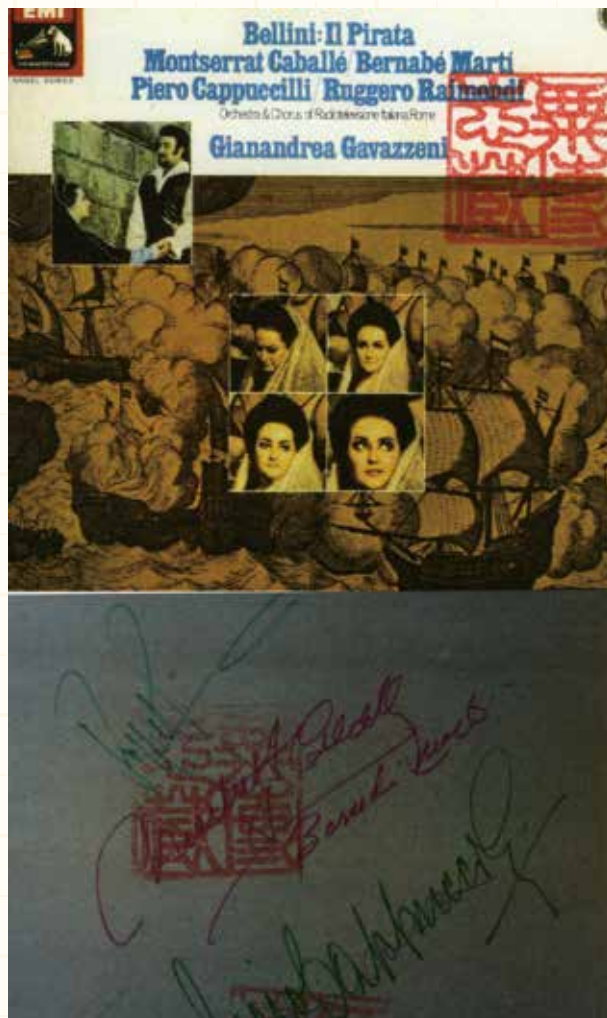


図198 ベッリーニの「清教徒」
ガヴァッツィーニ指揮、モンセラット・カバリエ

なお、生まれ育ちがよく、上品で礼儀正しいフェリクスは、ヴィクトリア女王、夫のアルバート公も含め、英国では絶大な人気を誇っていた。

フェリクスはショパンより1歳若くして死んだが、少年期から大曲を書き続け、オペラ8、交響曲5、弦楽の為の交響曲7、ピアノやヴァイオリン協奏曲11、室内楽曲32曲他、ピアノ曲、教会音楽など、膨大な作品を生み出した事は既に述べた。

「無言歌第6巻」は、クララ・シューマン

に献呈された。

メンデルスゾーンが、これだけ多くの作品を残し得たのは、若い頃に音楽の基礎を身に付け、芸術、旅行、宗教、歴史などに興味を持ち、多くの芸術家と交流し、インスピレーションを得て、創作に昇華したからである。

メンデルスゾーンは、初期ロマン派の中で、最高の作曲家、ピアニスト、オルガン奏者の一人であった。

ウェーバー、メンデルスゾーンの2人は、指揮棒を使った最初期の指揮者であった。

＜付録＞文学と音楽、その一例としての リストの「ファウスト交響曲」

メンデルスゾーン以上に、文学などからインスピレーションを得て、音楽に幅、深みを加えたのが、リストである。

リストは2つの交響曲を書いた。

一つは、ダンテの神曲に基づいた、「ダンテ交響曲、1856」である。

当初は、3楽章形式を考えていたが、ワーグナーの意見に従い、2楽章に変更した。

女声合唱の「マニフィカート」（マリアの讃歌）で終わる。

曲は、ワーグナーに献呈された。

今一つは、「ファウスト交響曲、1854、最終合唱付 1857」である。

「ファウスト」は、文豪・ゲーテが、生涯書き続けた彼の代表的長編戯曲で、第1部は1808年、第2部は1833年に発表された。

1830年12月4日、リストがベルリオーズに初めて会ったこの日の音楽談義で、ベルリオーズから、ファウストの事を知らされた事が分かっている（第1部）。

この日が、ベルリオーズの「幻想交響曲」初演の前日だったからである。

その後、長年に渡って、この戯曲を温めてきたリストは、交響曲として、この戯曲を結実させる事になる。

この交響曲を作曲するまでに、リストは、「幻想交響曲」や、ベートーヴェンの交響曲のP編曲を行い、その構成を身に付けると共に、指揮者として、多数の大曲を演奏し、その精神を身に染み込ませ、多数の交響詩他管弦楽曲を作曲していたリストにとって、交響曲の作曲の機は熟していたのである。

ワイマールを芸術都市に育て上げたゲーテの死後、さびれたこの都市を復興させるべく、1848年に宮廷楽長に就任したリストにとって、「ファウスト」を素材に交響曲を創作する事は、自然な成り行きだったのである。

ファウストの粗筋は以下の如くである。

『誘惑の悪魔・メフィストフェレス（以下メフィストと略す）は、神と賭けをする。

メフィストは、人間は理性を失い悪に陥ると。神はそうではないと、ファウストの名を挙げる。

メフィストは、錬金術師・ファウスト博士に、あらゆる快楽と苦悩を体験させる代わりに、死後の魂を自分に渡すという契約を結ぶ。

ファウスト博士は、グレートヒェンと恋するが、やがて破局する。

ファウストは、ギリシャ神話の世界に旅立ち、絶世の美女・ヘレネと結婚。

やがて現実世界に戻ったファウストは、幸福な夢の中にも死亡する。

賭けに勝ったとして、ファウストの魂は自分のものとする悪魔・メフィストに対し、ファウストの恋人だったグレートヒェンの祈りにより、ファウストの魂が救済される』と言う物語である。

リストの「ファウスト交響曲」は、ゲーテの「ファウスト」の3人の登場人物（2人と1人の悪魔）の性格描写を、3楽章で表現したもので、最後に「神秘の合唱」が入る。

『in drei Charakterbildern, nach

Goethe, I. FAUST. II. GRETCHEN.
III. MEPHISTOPHELES. und SCHLUSS
CHOR』(図199、赤下線)。

〈神秘の合唱〉

合唱は、暗黒からの光明を暗示し、永遠なるもの、天国への道を示唆すると言う。

森鷗外の訳による合唱を以下に提示する。

『一切の無常なるものは、
ただ影像にすぎず。

かつて及ばざりしところのもの、
ここにはすでに行われたり。

名状すべからざるところのもの、
ここにはすべてとげられたり。

永遠に女性的なるもの、
われらを引きてゆかしむ。』

(訳詞、森鷗外)



図199 リスト「ファウスト交響曲」
2台のピアノ版の楽譜の表紙

この曲は、1857年9月5日に、ワイマールの宮廷楽長・リストの指揮で、ワイマールのカール・アウグスト大公追悼演奏会として

初演され、ベルリオーズに献呈された。

これに先立つ9月3日、ゲーテとシラー像
の除幕式が行われた(図200)。



図200 ワイマール宮廷劇場前のゲーテとシラー像
(除幕式、1857)

リストは、ゲーテ、シラーなどの芸術家に敬意を払っており、「ゲーテ記念祭のための祝祭行進曲、1857」、「芸術家の祝祭行列、シラーの記念祭に、1857」、「シラー生誕百年祭のための祝祭劇・百年前、1859」他を作曲している。

ゲーテの「ファウスト」に触発され、初期ロマン派以後の数えきれない作曲家が、曲を創作した。

代表作品を以下列挙(年号は1800年代)。

- ・ ベルリオーズ「ファウストからの8つの情景、29」「ファウストの劫罪、46」
 - ・ ワーグナー「ファウスト序曲、40」
 - ・ シューマン「ファウストからの情景、53」
 - ・ グノーのオペラ「ファウスト、59」
 - ・ ボーイトのオペラ「メフィストフェレ、69」
 - ・ マーラー「交響曲第8番第2部、1906」
- 残念ながらショパンは入っていない。

図 201 は、リストの「ファウスト交響曲」の LP である。ここには、リストと親しい、ベルリオーズ、ワーグナーの曲の一部が入っている。ドラティ指揮、1982 年録音である。



図201 ドラティ指揮「ファウスト交響曲」(1982録音)
・ワーグナー「ファウスト序曲」、ベルリオーズ「8つの情景」

図 202 は、a の「ダンテ交響曲」を除き、20 世紀に world wide にリリースされた「ファ

ウスト交響曲」である。

ここに挙げた LP、CD は、20 世紀にリリースされた私のコレクションであり、全てで 18 枚あるが、日本人のものは皆無である。

日本の音楽界も、頑張ってもらいたいものである。

☆レナード・バーンスタインは、ボストン響 (d) と NY フィル (e) の 2 回録音。

☆ジュゼッペ・シノポリ (o) は、パドヴァ大学医学部の出身指揮者である。

ベルリン・ドイツ・オペラで「アイダ」を指揮中に心筋梗塞で死去した。残念。

この CD は、彼のサイン入りである。

☆サイモン・ラトル (m) は、バーミンガム響時代から注目していたが、いつの間にか (2002) クラウディオ・アバドの後任として、ベルリン・フィルの指揮者に就任した、と思っていたら、退職 (2018) してしまった。

図202 リストの「ファウスト交響曲」のLP、CD。(20世紀分)



(a) ロペス・コボス指揮
スイス・ロマンド、81, LP



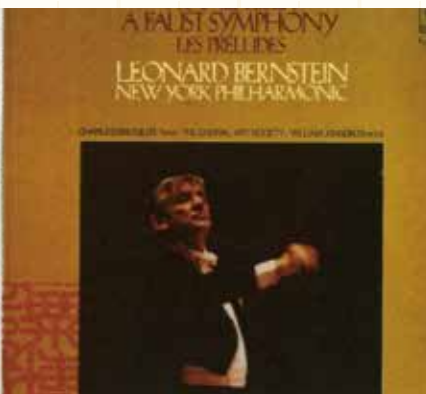
(b) ビーチャム指揮
ロイヤル・フィル、58, LP



(c) アンセルメ指揮
スイス・ロマンド、68, LP



(d) バーンスタイン指揮
ボストン響、77, LP



(e) バーンスタイン指揮
NY フィル、64, LP



(f) コンロン指揮
ロッテルダム響、83, LP



(g) フェレンツェ指揮
ハンガリア響、79



(h) ムーティ指揮
フィラデルフィア響、83



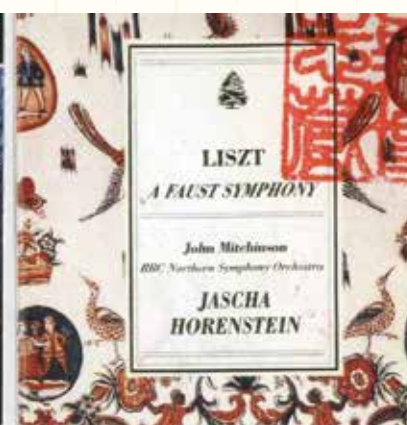
(i) ショルティ指揮
シカゴ響、86



(j) リカルド・シャイー指揮
コンサートヘボウ、91



(k) ダバロス指揮
ハンガリア響、92



(l) ホーレンシュタイン指揮
BBC北響、92



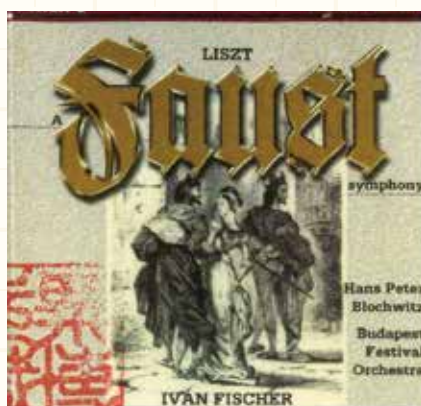
(m) インバル指揮
ベルリン放送響、92



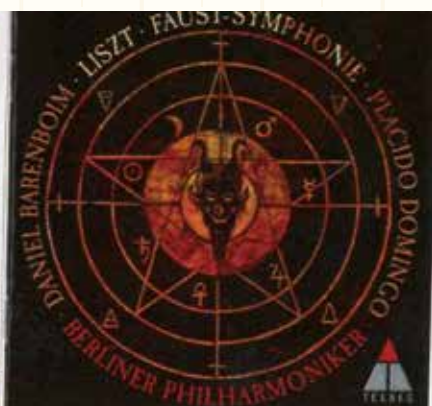
(n) ラトル指揮
ベルリン・フィル、94



(o) シノポリ指揮
スタツ・カペレ・ドレスデン、96



(p) フィッシャー指揮
ブダペスト・フェス響、96



(q) バレンボイム指揮
ベルリン・フィル、98



(r) 「ファウスト交響曲」
2P版、97

年月の過ぎる速さに驚かされる。この CD は、彼のサイン入りである。

☆図の (r) は、同曲の 2 台のピアノ盤。

リストの大曲の多くが、ピアノ版に編曲されているので、ピアノ曲としても楽しめる。

さてここで、10 代のフェリクス音楽史に残る、偉大な業績に言及しよう。

結論的に言えば、バッハの大曲、「マタイ受難曲」の復活公演である。

1825 年のパリ旅行で、フェリクスはバッハの音楽が、フランスで正しく理解されていない事に気付き、驚き、そしてドイツ人としての血が騒ぎ、ドイツ人としての自覚が目覚めたのである。

それに先立つ 1823 年 (14 歳)、フェリクスは大伯母のサラ・レヴィに、貴重なバッハの大曲、「マタイ受難曲、Passo secundum Matthaeum」の写筆譜を、クリスマスにプレゼントされた。

(私の知人であり、バッハの鍵盤楽器全集やリストやブゾーニ、イグナツ・フリードハイムらのピアノ曲全集を次々と完成させたギュンナー・ヨハンセンは、全集を完成させる為に最も苦勞した事は、楽譜探しと述べていた)。

1827 年 (18 歳) の冬頃から、土曜日の夕方に行なわれていた小人数の合唱団の珍しい曲の練習会で、フェリクスは「マタイ」の練習を提案した。

練習を開始して間もなく、仲間達はその曲の重要性に気付いた。

フェリクスとデフリエント (ベルリン王立歌劇場歌手) を中心に、ベルリン・ジングアカデミーのツェルターの協力も得て、1 年数ヶ月に及ぶ厳しい練習を行った。

1829 年 3 月 21 日 (20 歳) は、特別な一日となった。

300 ~ 400 人の素人音楽愛好家による合唱

団と、フィルハーモニア協会の素人楽団員、および一部の王立宮廷楽団員から成るオーケストラにより、「マタイ受難曲」の「(バッハ) 初演百周年の復活演奏会」が、フェリクスの指揮により、国王臨席のもと、宮内官総出席で大々的に挙行され、大成功に終わった。

この国王は、プロイセン王、ヴィルヘルム・フリードリヒ III 世で、かつてベートーヴェンが「交響曲第 9 番・合唱付き、1824」を献呈した王に他ならない。

ハイネやヘーゲルらも出席した。

この日は、あいにくパガニーニの演奏会と重なったが、入場できなかった聴衆が、会場外に溢れ、後日、2 回目公演が追加された。

(実際のライブツィヒの聖トマス教会での、バッハによる初演は、1727 年 4 月 11 日の聖金曜日と考えられている。

フェリクスの楽譜が、1729 年稿だったからとも言われている)。

演奏者と大観衆の誰もが深い感動に包まれ、この演奏会が音楽史上、エポック・メイキングな演奏会と感じていた。

2 回の公演収入は、「貧困家庭の娘の為の裁縫学校設立基金」に寄付された。

その後、3 回演奏会が開かれたと言う。

このような演奏会に、合唱を含む多くの演奏者が参加し、何百人も入り切れないほどの聴衆が押しかけ、然も収益を慈善活動に寄付するという事は、200 年前のベルリンの音楽環境が、現代の日本社会よりはるかに恵まれていた事を示唆している。

フェリクスは、「マタイ」の演奏に際しては、バッハの楽譜の省略や改変を行ったが、この公演の目的を、とにかく演奏会の成功に置いていたからであり、フェリクスの目的は、予想以上に達成された。

大バッハと言えども、当時、受難曲のような大曲はほぼ忘れ去られていたし、演奏不可能とも考えられていた。

そして何よりも、誰も興味すら持っていなかったのである。

然し、若いフェリクスは、一大センセーションを引き起こし、その評判はヨーロッパ中に広がり、その後のバッハ音楽復活の引き金、導火線になったのである。

この演奏会に至るまでの過程は、元来の指揮者の仕事を端的に示している。

自分の演奏したい曲を決定し、演奏者に曲に対する自分の解釈を的確に理解させ、演奏を指導し、演奏者と一体となって音楽を創りあげ、世間に向けて公表する。

これこそが指揮者の本来の仕事であり、使命であるのだ。

メンデルスゾーンは、「マタイ」に於いて、指揮者としてセオリー通りの事を完全にこなした（楽譜に忠実であるか否かは別にして）。

18歳の若者が、何百人もの一般社会人の演奏者を集め、そしてまとめあげ、然も歴史的結果を出したフェリクスの人柄と才能には、計り知れないものがある。

このような伝統的な指揮者のイメージを壊したのが、カラヤンである。

当時発達した航空網をフル活用し、今日はベルリン、明日はウィーン、東京……と文字通り世界中を飛び回り、音楽界の集金係と化した。自家用ジェット機を操縦し、当時の日本人にとって高嶺の花のスポーツカーに乗り、そして演奏会を「ショー」と化した彼を嫌う、日本人クラシック音楽ファンは多かった。

カラヤンの行動から、指揮者の仕事は何だろうという疑問が、一層強くなったと私は感じている。

ただ指揮台の上の彼が発するオーラと、そこから生みだされる華麗なサウンドを誰も否定できないのも、また事実であろう。

然し帝王と呼ばれた男の栄光も、時の流れに逆らう事はできない。

現代社会で、凡庸な指揮者の名前を聞く事はあっても、カラヤンの名を聞く事はない。

その後、フェリクスは英国、ヨーロッパを旅行し、多くの名曲を作曲した。

そして彼のデュッセルドルフ時代を経て、ライプツィヒ時代が始まる。

1835年（26歳）には、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団の第5代音楽監督に就任し、伝統あるこの楽団を屈指の楽団に育てあげた。

1843年（34歳）には、ライプツィヒ音楽院を創設し、後進の育成に努めた。

音楽院の教授陣には、その人脈を利用して、シューマン、モシュレス、ジェニー・リンド、ハウプトマン、ダビッド、ヨアヒムなどの高名な音楽家を招き、教育の充実を図った。

ヴァイオリニストのダビッドは、メンデルスゾーンの「ヴァイオリン協奏曲、1844」の



図203 メンデルスゾーン「ヴァイオリン協奏曲」ヨゼフ・スーク（ドボルザークの曾孫）

作曲の助言および初演を行った（図203）。

図204は、フェリクスが1843年に建立した、敬愛するバッハの記念碑である。

この記念碑建立の式典後、熱し易い評論家

のシューマンは、「このように神聖な名前をもつ、この素晴らしい人物を、我々は敬おう」と述べている。

メンデルスゾーンは、音楽史に多くの業績を刻み込んだが、その事を理解している日本人音楽家は非常に少ない。

(つづく)



図204 メンデルスゾーン建立の「バッハ記念碑」
(1843年4月23日、バッハの誕生日に除幕)
(樋口隆一著、バッハ、新潮文庫、昭和60年より引用)、左上は当時の版画

